



リステラス星圏史略  
古資料ファイル  
1 - 7



『優等生 - サイラス - 』

(発掘整理一旦完了)

霧樹里守 is 土岐真扉

『 優等生 （サイラス） ～ 窓辺にて。 』

---

『 優等生 （サイラス） ～ 窓辺にて。 』

『プロット 《優等生（サイラス）》 -窓辺にて-』 (by 遠野真谷人@高校の授業中☆)

---

[『プロット 《優等生（サイラス）》 -窓辺にて-』 \(by 遠野真谷人@高校の授業中☆\)](#)

2006年6月29日 [連載 \(2周目!・上古神代～水の大陸\)](#) [コメント \(1\)](#)

- ◎ 部屋替え騒動
  
- ◎ トルカがジュノかまうのをサイラスが見ている。
  
- ◎ 門限のはなし、そのいち。
  
- ◎
  
- ◎ トルカくん酔って御帰還
  
- ◎ トルカのおはなし
  
- ◎ サイラスのおはなし
  
  
- ◎ 街の火事
  
  
- ◎ トルカを出迎えるサイラス
  
  
- ◎ 自習室にて。……ジュノーをからかう連中とトルカの殴り合い。  
最新技術で作られたミスラス神像が壊れる。
  
  
- ◎ 怒るトルカと、ぶったおれるサイラス。
  
  
- ◎ 医務室にて。

[『 - 優等生（サイラス） - 窓辺にて。 』（by 遠野 真谷人 @専校の授業中☆）](#)

2006年6月30日 [連載（2周目!・上古神代～水の大陸）](#) [コメント（1）](#)

（前略）

○

エオランジュの国のリノの街（まち）の、少しばかり昔の寄宿学校での話だ。オイゲンクローク学院はリノの街でも古くて有名で、だから国中から若い男の子たちが集まっていた。名門なだけに躰も厳しく、特に寄宿舎ではうるさく言われる。その、オイゲンクロークで、今は一年中でも最も騒々しい季節 …… 新学期と部屋替えの季節なのだった。

（中略）

「トルカ、トールッカ、トールンカ！」

（騒ぎ屋） （お調子者）

（中略）

「一年間よろしく。

きみがトイラーカ・サルマスベイン？」

「……さ、サイラス・デュ・ヨカナイン？」

優等生（おきにいられ）の……!？」

「……ぼくはそんなふうに呼ばれているの？」

知らなかったな。」

（後略）

（トルカ） トイラーカ・サルマスベイン

（サイラス） サイラス・デュ・ヨカナイン

（ジュノー） ジュノ・ペッデゼン

（イロン） イロンド・タオ＝カイ

（サリュ） トルカの彼女

(後略)

『 優等生 -サイラス- 』（たぶん高校2年。）

---

『 優等生 -サイラス- 』（たぶん高校2年。）

2016年7月8日 リステラス星圏史略 （創作）

-優等生（サイラス）-

最期の荷物にひもをかけ終わったところでちょうど扉が開いた。

「トルカ、見てきたよ、新しい部屋割り。」

「おう。ごくろう、ジュノー。おれ何室だった？」

「308。」

「げっ！ あそこまでこの荷物運べってのかよ～～」

「うふふ」

「あ、おまえは？」

「407」

「じゃ、近いな。中階段はさんで上下じゃないか」

「うん...べつべつ...」

呟くように言った小さな声をトルカが聞きとるよりも早く、騒々しく扉を蹴あけて一団がなだれこんできた。

「よーお、トルカ。まだいたのかよ。さっさとこの部屋あけてくれよなっ！」

「悪い。いま出るところだ2人とも」

「なんならお引越し荷物は我らトンネル団にお申し付けを。おひとり様20リードで引き受けまーす」

「ばかやろー、おまえらに任せた日にゃ秘蔵のポスターヌード画が途中で全部消え失せらあ」

「ちえーっ、しっかりばれてやがる」

「あたりまえだ。...じゃな、ジュノー。またそのうちな。」

「トルカ！それでね、きみの同室...、あ...。」

大荷物を腕いっぱい抱えたトルカは足で扉を閉める。

○

エオランジュの国のリノの街（まち）の、少し昔の寄宿学校の話だ。秋のはじまりが新学期にあたるここでは、紅葉にはまだ少し早い今がちょうど部屋替えのシーズンだった。

「トルカ、トールッカ、トールンカ！」（トルカ騒ぎ屋、お調子もん！）

「トルカ、トールッカ、トールンカ！」（トルカ騒ぎ屋、お調子もん！）

「てめーらーっ!!」

度胸のいい下級生がふたりばかり、すれちがいざまにはやしたてながら駆け降りてゆく。腕がふさがれて身動きのとれないトルカも、さすがに階段なので足をひっかけてやるのは遠慮した。

「カロン！ トイラ！ 覚えてるからなっ!!」

がたがたと本当に騒がしい季節だ。

「.....よっ。」

そういう事態を予測してなのか、わざわざ半ば開け放されてあった扉を足でこじあけて、

「おう一年間よろしくなっ！」

一歩、部屋に踏み入れるなり、ずるう～…

トルカは、おもわず、よろめいて戸口の柱にもたれかかった。

「……サ、…」

そこにいて、窓辺の机で片づけものをしていた彼、淡い逆光のなかで、ゆっくりとふりむいてみせた少年は…

「サ、サイラス・ドライズ デュ・ヨカナン？ 優等生（おきにいられ）の?!」

確かに。さして高くも低くもない背たけにぴっちり制服を着こみ、やわらかな物腰でトルカに向きなおったその姿は、心持ちながめにそろえられた黒い髪をのぞけば、"完璧な優等生"を絵にでも描いたようだと言えた。

冷たくさえ見える落ち着いた表情だ。

「一年間よろしく。きみがトイラーカ・サルマスベイン？」

「…聞かなくてもどーせ知ってんだろ。"不良"のトルカだよ、おれア」

すねたように答える彼をいぶかしげに見つめて、サイラスと呼ばれた少年は机の整理へと意識を戻した。

トン、と教科書類をそろえて棚に入れる動作が、不思議なほど穏やかだ。

「君が、来るのが遅いから、勝手に右の机に決めさせて貰ったけれど、もし不満があれば…」

「んで？ 誰のさし金だよ？ リガーオか、それともルクナス？ …ま、先公なんてどれも同じよーなもんだけどな」

「…なんの話だい？」

「ばっくれないで欲しいんだよね、おれとしちゃあ。何の意図もなしにこうゆう部屋割りが成立すると思うか？」



「確かに、門限を守らなすぎる生徒がいて困っているという風には聞かされていたけど」

「... "門限を守らなすぎる"。はっ！」

あきれたように叫んでトルカは荷物の山を寝台の上にぶちまけた。

「ずいっぶんと手ぬるい表現だよな。優等生どの！」

「何処へ？ トルカ トイラーカ。もうすぐ部屋替え点検だよ。それまでに整頓しておかないと...」

「知ったことか！ おれァこんな部屋はゴメンだ！」

「トイラー...」

「おれァトルカ不良のトルカだよ！」

くるりとふりむいて捨てゼリフにそう怒鳴ると、不思議な...西陽色の逆光のなか、はかなげに、さびしげにさえ見える、気弱い微笑を、優等生は浮かべた。

「ここに、居てくれるね？ トルカ。」

何故彼は、部屋を賭け出して、行ってしまわなかったのだろうか。

○

「トルカ。」

おずおずと、彼の隣の空席に指を置いたのは、気弱なジュノーだった。

「よお。どうだ？ 新しい部屋は。まゝ座れよ。」

「...いいの？」

ぱっと顔を輝やかせて、遠慮がちに腰をおろすのを、トルカはいつものようにげんな顔で見

つめていた。ジュノの態度は、いつでも少し、彼の理解をこえたものだったから。

「うん。あのね。タオ口と同室（いっしょ）だよ。」

「あの鼻とんがりかよ？ げえ。...そういや、奴らに今朝泣かされてなかったか？ おまえ。」

「見てたの？ やだな。」

コトンとかゆをすくうさじを置いて、ジュノは目を伏せる。

「また、やっちゃったんだ、...ぼく...」

「.....ばか。」

「え。」

ぎくりとして小柄な体を、ジュノはますます逃げるようにちぢこめた。

「まだ、恐かったのか？ 夜中に便所に行くの。ならなんでおれんところに来ねェんだ。」

「え... だって... でも...」

「階段ひとつ降りるだけだぞ。それくらいならひとりでも歩けるだろう？ 松明だってあるんだ。」

「だって、トルカ。だって...」

小さな声でぱくぱくと口をあけて、いきなりジュノは泣きだしていた。

(描写、もっとちゃんとやる。)

2016年7月8日 リステラス星圏史略 (創作)

優等生 (サイラス) ~窓辺にて。

## 1. 部屋替え騒動。

鼻唄をうたったり悪態をついたり、ぶつぶつひとり言をまき散らしながら、ひよろっとした長い指で彼はけっこう器用に引っ越し荷物をまとめているところだった。

ときおり、手の動きをとめては物欲しそうに (なかばうらめしげに) 陽光のふりそそぐ窓のそとの、新緑の季節をながめやり...それからまたやれやれという風で、腰に両手をあてて雑然混沌とした自分の荷物の山をにらみつけ、えいやと仕事にとりかかるのだ。

ごわごわした栗色の前髪が額 (ひたい) におちかかる度にうるさそうに払いのけていたが、やがてあきらめたように腰の紐帯 (キープ) をほどくと、それでくるくると撒いて邪魔な髪をおさえつけた。

彼がよくやるもので近頃流行 (はや) ってきた例の型だ。

制服の、縛ってあったウエスト胴のあたりが自由になったもので重い冬服の布地がゆらりと揺れて、いかにも教授たちの怒りを呼びそうなラフなスタイルいい加減な恰好になった。

軽い足音がして、ちょうど最後の荷に紐をかけ終わったところで背後の扉がひらく。

「トルカ、見て来たよ、新しい部屋割り。」

入って来たのは白と見えるほどにうすけた茶の髪の小柄な少年で、どことはなしに全身の雰囲気、よわよわしくて、痩せていた。

「おう、ごくろう、ジュノー。おれ何室だった？」

「308。」

「げっ！ あすこまでこの大荷物を運べてエのかよ～～」

「うふふ、僕の倍はあるね」

ジュノと呼ばれた少年は小さな顔で静かに微笑んだ。

「あ、おまえは？」

「407」

「ああ、じゃ、良かったな。結構近いじゃないか。中階段はさんで上下だ」

「そう？ うん... ね...」

呟くように言った小さな声をトルカが聞きとるよりも早く、けれど騒々しく扉を蹴りあけて一団がなだれこんできてしまった。

「よーおトルカ、まだいたのかよ。さっさとこの部屋あけてくれよなっ！」

「悪い。いま出るところだ2人とも。ジュノー、ちょい、これ持たしてくれよ。」

全部をいちどきに運んでしまおうとあがいている彼に、ひとりがニヤサニチャツと笑ってつけくわえた。

「なんでしたらお引っ越しは我らトンネル団にお申しつけを。おひとりさま20リードで引き受けま～す」

「ばかやろー、おまえらに任せた日にゃ、秘蔵のあぶな絵（ポスター）が途中で全部消え失せらあ」

「ちえ～っ。しっかりバレてやがる」

「あったりまえだ。...じゃな、ジュノー、またそのうちな。」

「.....トルカ！ それでね！ きみの同室... あ...」

大荷物を腕いっぱいにかかえたトルカの姿を隠して重い木の扉はしまる。

「おら～。邪魔なんだよ。さっさと行けよ。」

「あ、ご、ごめんなさい。僕...」

威勢のいい少年たちに囲まれて、ジュノーは頼りなく自分の物をひろいあつめた。

エオランジュの国のリノの街の、すこしばかりむかしの寄宿学校での話だ。

オイゲンクローク学院はリノの街でも古くて有名で、だから国中から若い男の子たちが集まっていた。名門なだけに躰けも厳しく、特に寄宿舎ではうるさく言われる。

その、オイゲンクロークで、今は一年中でも最も騒々しい季節...新学期と部屋替えの時期なのだった。

のそのそとトルカは本の山に視界をさえぎられながら階段を昇って行く。

「トルカ、騒ぎや（トールッカ）、お調子もん（トールンカ）！」

「トルカ、騒ぎや（トールッカ）、お調子もん（トールンカ）！」

わあっ！と、度胸のいい下級生がふたりばかり、すれちがいざまにはやしたてながら駆け降りて行ったりする。

両手がふさがって身動きのとれないトルカも、さすがに階段なので足をひっかけてやるのは遠慮した。

「カロン！ トイラ！ 覚えてるからな！」

「トルカ！ トールッカ！（騒ぎや！）」

「このやろ～～っっ」

右にぶつかり、左にぶちあたり。がたがたと本当に騒がしい季節だ。

「……よっ。」

そういう事態を予測してなのか、わざわざなかば開け放たれてあった扉をつま先でこじあけて、

「おう、一年間よろしくなっ！」

一歩、部屋に踏み入れるなり、ずるう～～…

トルカは、思わずぐらついて戸柱にもたれかかった。

そこにいたのはトルカと同じほどの年恰好の少年である。背はすこしばかりかきく低く、筋肉もトルカほどはついてはいない。どちらかといえばすらりとした痩せがたで、おちついた青色の下衣に、制服の貫頭衣（トーガ）をきちりと身につけていた。

トルカのように締紐（しめひも）をほどいてしまったり、よくやるようにゆるめて結ぶことすらせず、ましてその帯で伸ばし放題の頭をまとめておくなどということもない。

そこにいるのは…すこし長めに切りそろえられた髪が漆黒の射干玉（ぬばたま）色である、ということのをのぞけば……どこからどこまで、一分のすきもない、教授連が絵に描いて皆に見せたがるだろうほどの完璧な模範生図、だった。

「やあ。」

生きてあるく模範生図が口をきく。窓辺に立つその少年はちょうど机の周囲をかたづけていたところらしく、初夏の日差しを背に受けて、トルカには、それがほとんど後光に見えた。

…

「サ、サイラス・デュ＝ヨカニン？ 優等生（おきにいられ）の！？」

荷物をふたつみつつ取り落としながらトルカは啞然として呟く。

「……ぼくはそんな風に呼ばれているの？ 知らなかったな。」

ひとを見下したような落ちつき払った無機質な微笑、だとトルカには思える様子でだけもの（サイラス）はわらった。

「一年間よろしく。きみがトイラーカ・サルマスベイン？」

「...聞かなくてもどっせ判ってんだろ。『不良』のトルカだよ、おれア」

すねたちょうに答える彼をいぶかしげに見つめて、優等生（おきにいられ）と呼ばれた少年は机の整理へと意識を戻した。

トン、と教科書類をそろえて棚に入れる動作が、不思議なほど穏やかだ。

「君が、来るのが遅いから、勝手に右の机に決めさせて貰ったけれど、もし不満があれば...」

「んで？ 誰の指し金だよ？ リガーオか、それともルクナス？ ...ま、先公なんてどれも同じよーなもんだけどな」

「.....なんの話だい？」

—ばさっとトルカは寝台の上に荷物をぶちまけた。

「ばっくれないで欲しいんだよね、おれとしちゃあ。何の意図もなしにこうゆう部屋割りが成立すると思うか？」

「確かに、門限を守らなすぎる生徒がいて、困っているという風には聞かされていたけれど...」

「"門限を守らなすぎる"。はっ！」

あきれたように叫んでトルカは寝台の上に荷物をぶちまけた。

「模範生どのは修辞学までも御優秀でいさせられる！ ずいっぶんと手ぬるい表現をしてくれるじゃないか、ええ?!」

「きみが、なにを怒っているのか、わからないんだけど、」

真面目に困惑しているらしい表情の、相手の顔をトルカは睨みつけた。

トルカにだって解らない。ただ、"学院一の優等生（おきにいられ）"と呼ばれるほどの人間を目の前にすると自分の不良めいた格好がなぜだか後ろめたく、その反動でむしように腹がたってくるのだった。

個人的に模範生（いいこ）なんていう人種は大嫌いだったし、"門限をまもらない"からと監視役をつけられた、罨にはめられたという感覚は、あたりまえ以上にトルカの癩（かん）にさわった。

「……………」

「、何処へ？ トイラーカ。」

黙。

「もうすぐ点検の時刻だよ。それまでに整頓しておかないと…」

「おれァ "不良の" トルカだよっ！」

くるりとふりむいて捨てゼリフにそう怒鳴る。

今夜はもう帰らないつもりだ。と、…

不思議な……傾きはじめて淡い黄金（こがね）色の陽光のなか……サイラスが、はかなげな、さびしげとさえ思える気弱な微笑を浮かべて立ちつくしているのを、トルカは見てしまったのだ。

「え……？」

それは、いつも生徒代表として壇の上に立つ、無機質な優等生（おきにいられ）の顔を相手にするのは、ずいぶん勝手に違っていた。

その一瞬、トルカはなにかを……おそらくは以前にジュノが言っていたなにかを……思いかえすともなく思い出していたのだ。トルカ自身は意識さえすることなく。

「ここに、いてくれるね？ トイラーカ。」



頼むような口調にそれは近かった。トルカは鼻を鳴らし、途惑い、...それから急に、卑怯な教師どもに腹を立てていたことを思い出して、叫んだ。

「知るか！」

扉の音たかく閉まった後の部屋で、ただひとり優等生は、立ったままている。

...

(根は純粋な不良と、屈折した根暗な優等生)

(あたしのパターンは、いつもこれだ。けっけっけ。)

2016年7月8日 リステラス星圏史略 (創作)

## 2. ~~緑光(仮)~~

芽吹きはじめた條々をわずかに見降ろす窓だった。薄皮張りの戸をたてきり、燈明の煙があわくたれこめていた、長い冬を過ぎて、からりと開け放された図書館の中はうそのように明るい。

緑の輝きが目の前の柱に映じ踊るのを、見るともなしに眺めやってサイラスは休憩をとっていた。

今日の自主課題はもう終わった。ので—あとは、前々から興味があった神学書に手をつけてみようか、それとも史学の予習をもう少し進めておこうかと、考えながら。

~~—柱と書架に他の場所からさえぎられたそこは...優等生のいつもの席は...吹く風以外は訪れるものもなく、静かだった。~~

~~—時折そn風によって斜め下の食堂からかすかなざわめきが聞こえてくる。~~

"不良のトルカ"、トイラーカ・サルマスベインはこの10日間というもの、ろくにサイラスと口をきいてはいなかった。ほとんど部屋に戻って来もしない。

教室の片すみでいつも誰かしらが聞こえよがしにささやいている噂では、"街の女たち"のところを泊まり歩いているという話だったが...

そう言われても優等生には、いまひとつ実感としては意味を把握できかねていた。

彼の留守を見はからって、授業中、一日部屋で寝ていくことなどもあるようだ。

彼(サイラス)に解っているのはトルカは部屋に帰りたくないのだろうということ。時折り着替えや荷物を取りに現れては、寝台に放り出したままだった筈の荷物がきちんと片づけられているのを見て(サイラスの穏やかな謝罪には耳も貸さずに)腹立たしげに鼻をならし、また御丁寧にすべてをひっくり返して去って行く、その態度だけだった。

何年も続いた静かな舎監生室での一人暮らしから彼を俗世にひき戻した、若い教授は、、しき

りに迷惑をかけるねと気に病んでいたが...

サイラスはまだそれほど苦にはしていなかった。どうしていいのか解らないだけで。ただ、誰かトイラーカからそれほどまでに嫌われるということに、胸の痛みにも似たかすかな途惑い感じているのだった。

ふと、そのトイラーカが幅広い斜面をはさんで反対側の、食堂室の窓辺に席をしめているのに、サイラスは気づいた。一緒にいるのは去年同室だったという温和しいジュノ・ペッデゼンだろうか？ 目立たない弱々しいジュノーと、すでに"不良"と呼ばれるにふさわしいだけの振る舞いをしはじめていたトイラーカとの部屋割りが発表された当時も、学年中がいろいろな取り沙汰をしていたことをサイラスは思い出していた。

トイラーカたちは席を立ち、やがて5分ほどしてジュノ・ペッデゼンが、校庭と図書館のあいだに広がる緑濃い土手にぶらぶらと姿を現した。

「.....トルカ。」

おずおずと彼の隣りの席に指を置いたのは気の弱いジュノの方だったのだ。

「お、よお。どうだ？ 新しい部屋割り。まあ座れよ。」

「いいの?!」

ぱっと頬を輝やかせて、遠慮がちに腰を降ろすのを、トルカはいつものようにすこせげんそうな顔で見つめていた。ジュノの態度は、いつでも少し彼の理解を越えるものだったから。

その沈黙を、話を求められているのかと解釈してジュノーが呟く。

「.....うん。あのね。タオ=カイと同室だよ。」

「あの鼻とんがりかよ？ げえ。...そういや、奴らに今朝、泣かされてたんだって？ おまえ。」

「...聞いちゃったの？ やだな。」

コトンと、かゆをすくうさじを置いて、ジュノーは目を伏せる。

「また、やっちゃったんだ... ぼく...」

「.....ばか。」

「え。」

ぎくりとして、小柄な体を、ジュノはますます逃げるようにちぢこめた。

この一年、トルカはジュノをそんな風に言ったことはなかった。

だけど、とうとう...。

泣いたりしちゃだめだ。魔法の時間は、いつかは終わるのだから。

同室ではなくなった瞬間から.....

「まだ、恐かったのか？ 夜中にひとりで便所行くの。ならなんでおれン所に来ねえんだよ。」

「え.....」

予想していたのと、それは逆のセリフだ。

「でも... トルカ、でも...」

「階段ひとつ降りるだけだぞ。それくらいなら、ひとりでも歩けるだろう？ 松明だってあるんだぜ。」

「だって...」

小さな声でぱくぱくと口をあけて、いきなりジュノーは涙をこぼしていた。

そんな筈があるだろうか？

「お、おい！」

トルカはうろたえた。

「悪かったよ。来ようにも、ここんとおれが部屋にいなかったんだもんな。悪かったよ。悪かったってば。おい！ 泣くなよ！」

「.....違うよ。トルカ、ごめん...。」

ごしごしと袖で目をこすった。

「だけどきみ、また忘れてるんだ。ぼくもう同室じゃないんだよ。dから、きみが門限やぶっても、教授にごまかしておくのも出来ないし、窓の鍵あけておくのもできないんだ。だから.....」

臆病者が優しくしてもらえる権利も、もうないのだ。

「.....」

トルカが啞然として口を開けるのを、ジュノーは見なかった。

「.....おまえ。.....しまいにゃ本気で怒るぞ。.....」

そう言いつつ既に本気で怒っているらしい声に、ぎょっとして目をあける。

「それじゃなにか？ このトルカ様は利用価値がなくなりゃ友達（ダチ）と縁を切るような、安っぽい男だったのかよ？ どうりでこのところひとりでうだうだメソメソやってやがると思や... .. え〜い、おれもう知らね！ 勝手にしろってんだ... たくう...。」

ど一せおれえは見かけは軽薄だよ、とかなんとか。

「トルカ！ ごめん！ ぼくそんな意味じゃなくて、ぼくが.....。ぼくは... 」

「だから泣くなっつーんだよ。おまえときたらまあ、いちっち死ぬの生きるのって感じの大騒ぎにしやがって、まあ。」

((...だもん。ぼくには...。))

胸のなかのささやきを、トルカには知る由もなかったが。

二階にいたサイラスには気づかず、登ってきたジュノーは土手の頂上に腰を降ろして、見るともなし空を見上げたり、草をもて遊んだり、していた。

その華奢な後ろ姿がなぜか至福の光とでも言うべきものに包まれているように感じたのは、あながちサイラスの気のせいとばかりは云えまい。突然に澄んだ細い歌声が流れだすのを耳にしても彼は驚かなかった。

古い古い友情の詩（うた）に聞き覚えのない節をつけて、ジュノーはひとり静かに口ずさんでいた。

○

教授（おとな）たちへのイラだちの、やつあたりなのだという自覚は持っていたから、部屋や廊下で出会うたびにトルカに見せる、困ったようなすこし悲しいような優等生の表情はぐさぐさと良心につきたたっていた。

ジュノーの問題もあるし、毎日あちこちを泊り歩くというのもさすがに大変だったし。

と、いうわけでトルカは今日、早い時間にいつもの飲み屋で二、三杯、景気をつけると門限通りに寄宿舍まで帰って来たのだ。

扉を開けると案の定、かすかに驚いた顔でサイラスが振り向いた。

「トイラーカ。」

「……え〜とっ。…今日、ジュノーが助けてもらったそうで、…一応礼を言っとく…。」

「……ああ。」

困ったようにあいまいに優等生は微笑を浮かべた。

それは朝食時のできことだった。ジュノーと同室のタオ＝カイが、嘲いながら彼を食堂までひ

きづってきたのは。

「諸君っ！ 見てくれたまえ。」

得々としてタオ=カイはそれを抱えさせられて泣いているジュノーを皆の前につきとばしたものだ。

「おれたちはもう14だぜ。14にして……お・ね・しょ。…寝小便だ。誇りあるオイゲンクロークの学生としての自覚があるのかどうか、を、おれアこのふぬけにおうかがいしたいねっ！」

「……臭えぞ、このチビっ！」

「退学だ！」

「放り出しちまえっ！」

そこは少年ばかりの学校ということで、気の荒いものも多い。タオ=カイの仲間たちの間でたちまち飛びかいはじめたヤジや、怒号のなか、もともとが弱弱しい少年は哀れなほどに小さく見えた。

助けに行こうとは思ったのだ、とトルカの友人たちは云った。もともと秀才ぶったタオ=カイの一派とは折り合いが悪かったし、ジュノーは一応、トルカの保護下にあるということになっていたから。

が、それよりも速く、誰かがひそやかに席を立った。

「……やめたまえ。」

静かな、けれど食堂中に響いた、とおる声だった。

それもその筈、毎朝全校生徒の前で教書を朗読する声なのだ。

「イロンド・タオ=カイ。人の生理的条件を誹謗のたねにする態度はどうかと思うな。」

あくまでも穏やかに。けれどもこういった学生間のいざこざに…口の悪い連中に言わせれば"俗世間の"できごとに…学院一の優等生（おきにいられ）が関心を示すなど、かつてない出来事だったのだ。

一瞬、食堂は静まり返った。

なりゆきに関心のあったものもの、無視していた者も。

「デュ=ヨカニン...？」

タオ=カイは自分では怪物（サイラス）に次ぐ優等生だと信じている秀才だったで、しばしば「デュ=ヨカニンとぼく以外は」みんな馬鹿だ、という風にカッコでくくった言い方をしていた。

（そういった彼の考えは、サイラスには知るところではなかったが。）

それだけにショックも大きかったのだろう。くるりと振りむくと、取り巻きたちに声をかけるのも忘れてき然と食堂室から去って行った。ごう然と、紅く燃えた頬をもたげて。

皆が見守るなか、サイラスは静かに、自分の慎ましい食事に注意を戻していた。

○

「さし出たマネはしない方が良かったかも知れないね。きみの友人達も、なにか手を打とうとしていたようだったし。」

「連中がタオ=カイの奴とやりあうと騒ぎが大きくなるからな。ジュノーのためにゃ、良くないだろ。」

かすかにほっとしたような、表情を読みにくい優等生を前にして、2、3杯ぼっちの酒じゃ、



「没！」 (2016.07.08.)

---

[『優等生...窓辺にて。』 1. 部屋替え騒動。 \(専門学校\)](#)

2016年7月8日 [リステラス星圏史略 \(創作\)](#)

...ところでこの2人、エルと白熊さん（サキとレイ）だったり...

...w (^ ■ ^ ; ) w...

するような、しないような...ツwwww☆

コメント



[霧木里守≡畑楽希有 \(はたら句きあり\)](#)

2016年7月8日21:56

ところで以前にもどこかで書いたと思いますが、これ、「夢で視た」のは

「トルカ、トールッカ、トールンカ！」の悪口？部分だけが鮮明で...

「夢のなか」の私は、

「片思いで叶う見込みも全くなって卒業しちゃうしもう会えなくなるので悲しい」しか覚えていない、ほとんど地縛霊のよーな夢（ー；）だったんですが...★

その後の検証作業？で、こいつら実は「帝国における絶対身分差別制度」（成文法）を「廃棄する」という、歴史的な大転回点の立役者？

だったんじゃない...？というような後付設定が出来上がりましたが...w

このハナシ自体は完全に「BL的色彩」しかないですしw

後の世の全国議会ひっくり返しての根回し&弁論合戦なんて、小説に描けるものでもないし...★

w (^ □ ^ ; ) w

「没！」

...「商業用」に、将来完成させる、という見込みは...おそらく、無いでしょう...☆

(なので、これにて「成仏」して下さい、没原稿の紙サマ...★)

リステラス星圏史略  
古資料ファイル  
1-7  
『優等生-サイラス-』

<http://p.booklog.jp/book/108257>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/108257>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/108257>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ